

『小学唱歌集』と英詩翻案

衣 笠 梅 一 郎

「ニコニコして嬉しそうに、スパイサー氏は戸棚から手風琴を取り出し、彼の所謂『未熟な演奏』に対するいつもの言訳をしてから、腰を下ろして『ホーム、スイート・ホーム』を弾いた。彼はそれを何年もの間弾いて来たのだが、腕前は明らかにちっとも上達しなかった。『ホーム、スイート・ホーム』の次には『スコットランドの釣鐘草』、その次には『アンニー・ローリー』が奏せられ、スパイサー氏の演奏種目はそれだけでおしまひだった。」これはジョージ・ギンニング (George Gissing, 1857-1903) 作『蜘蛛の巣の家』(The House of Cobwebs, and other Stories) の巻頭の短篇「蜘蛛の巣の家」の一節である。この短篇集が初めて出版されたのは一九〇六年、即ち明治三十九年のことであつて、上記の引用によつて“Home, Sweet Home”を始め、“The Blue Bell of Scotland”や“Annie Laurie”が、英国に於て一般に愛唱されたものであることが窺ひ知られる。

稿著註 ギンニングの“The House of Cobwebs”では“Blue Bell”を“Bluebells”と綴つてゐる。また、唱歌集の中には“Blue Bells”と綴つてゐるものもあつて、坊間に流布してゐる“The Golden Book of Songs”もその一つである。

わが国ではジョン・ンワード・ペイン (John Howard Payne, 1791-1852) 作“Home, Sweet Home”はその本

『小学唱歌集』と英詩翻案

『小学唱歌集』と英語翻案

来の意味を汲んだ歌詞を原曲に配して、「埴生の宿」と題して今日も広く愛唱されている。この歌詞は文部省音楽取調掛編纂『小学唱歌集』及び『幼稚園唱歌集』に次いで、明治二十二年十二月に刊行された東京音楽学校編『中等唱歌集』に初めて現われた。「The Blue Bell of Scotland」即ち「スコットランドの釣鐘草」はわが国では、「埴生の宿」ほどには人目に膾炙していないが、その歌詞の翻案が『小学唱歌集』に収録されている。同唱歌集初編、第十八の「うつくしき」と題する唱歌がそれである。その全篇を次に掲げよう。

一 うつくしき。わが子やいづこ。

うつくしき。わがかみの子は。

ゆみとりて。君のみさきに。

いさみたちて。わかれゆきにけり。

二 うつくしき。わがこやいづこ。

うつくしき。わがなかのこは。

太刀帯たぢおびて。君のみもとに。

いさみたちて。わかれゆきにけり。

三 うつくしき。わがこやいづこ。

うつくしき。わがすゑのこは。

ほことりて。きみのみあとに。

いさみたちて。わかれゆきにけり。

東京芸術大学音楽部所蔵、伊沢修二稿本『唱歌略説』(稿者註 明治十五年一月三十、三十一兩日に催した音楽取調成績報告の際使用した、音楽及び唱歌の条理を解説したもの)の中に、「うつくしき」について次のような記載が見出される。「此歌ハ稲垣千頼ノ作ニシテ君上ニ随ヒ征討ナドニ行タル時ノ情況ヲ述ベタルモノニテ、ウツクシキハ愛スベシト云ハンガ如シ(中略)楽譜ノ古来蕪格蘭土ニ伝ハリテ戦場に赴キタル人ヲ思フ歌ナリ」今、参考のために原詩の“*The Blue Bell of Scotland*”を全篇“*The Oxford Song Book*” Meloday Edition, Vol. 1, Collected and Arranged by Percy C. Buck (1931) から引用しよう。なお、作詞者はジョーダン夫人 (Mrs. Jordan) であつて、作曲者はじつは“*Composer or Origin of Tune Traditional*”と附記されている。次の引用によつて「うつくしき」はその樂曲を踏襲してゐるのみならず、その歌材を多少これから仰いでいることが確められる。

‘Oh! where, and Oh! where is your Highland laddie gone?’

Oh! where, and Oh! where is your Highland laddie gone?’

‘He’s gone to fight the French, for King George upon the throne,

And it’s Oh! in my heart, how I wish him safe at home!’

‘Oh! where, and Oh! where does your Highland laddie dwell?’

Oh! where, and Oh! where does your Highland laddie dwell?’

‘He dwells in merry Scotland, at the sign of the Blue Bell;

And it's Oh! in my heart, that I love my laddie well!

'What clothes, in what clothes is your Highland laddie clad?

What clothes, in what clothes is your Highland laddie clad?'

'His bonnet's of the Saxon gree, his waist-coat of the plaid;

And it's Oh! in my heart, that I love my Highland lad!'

'Suppose, Oh! suppose that your Highland lad should die!

Suppose, Oh! suppose that your Highland lad should die!'

'The bagpipes shall play over him, I'll lay me down and cry;

And it's Oh! in my heart, that I wish he may not die.'

稿著註 坊間に流布している唱歌集の中には、“French”¹を“Foe”と記し、“dwells”を“dwelt”と過去形にしているものもある。

以上に挙げた引用にて分かるように、「うつくしき」は三節に纏めてあるが、原詩の方は四節から成っている。何れも出陣した若者に対して、思いを馳せたものであって、この点では両者の趣向は共通しているが、翻案に於ては若者が長子、次子、末子の三人になっている。同じ句を繰り返して淡々と歌っているところは、明らかに原詩から思いついたものである。三人の若者はそれぞれ各節に分かれて歌われていて、その用語の工夫のよきには、作者の苦心の程が偲ばしうである。

Annie Laurie の原曲は『小学唱歌集』第三編所収の第五十六「才女」に適用されている。これはスコットランドのアマチュア作曲家、ジョン・スコット卿夫人 (Lady John Scott, 1810-1900) が一八四七年に作曲したものである。次に掲げるのが「才女」の歌詞であつて、全篇二節から成つていて、この邦語の歌詞の作者は遺憾ながら不詳とされている。

一 かきながせる。筆ふでのあやに。
そめしむらさき。世々あせず。
ゆかりのいろ。ことばのはな。
たぐひもあらじ。そのいさを。

二 まきあげたる。小簾こすのひまに。
君のころも。しら雪や。
廬山ろくせんの峰みね。遺愛ひそめのかね。
めにみるごとき。その風情ふうせい。

以上に引用した歌詞は言うまでもなく、学問文才に長じ、或は才気煥発の女性として、第一節は『源氏物語』の作者、紫式部を、第二節は『枕草子』の作者、清少納言を、それぞれ、歌材として取り扱ったものである。この唱歌がその楽曲を同じくすることによって、かねてわが国に知られている“Annie Laurie”の歌詞は、上掲のものとは凡そ縁の遠いものである。然しながら、女性を称える点に於て、邦語歌詞の模倣が認められる。原詩の全篇を“The Oxford

『小学唱歌集』と英詩翻案

Song Book” から引用して参照に供しよう。この歌詞の作者を不明とする唱歌集もあるが、これはウィリアム・ダグ
ラス (William Douglas) とおぼしむる。

Maxwelton braes are bonnie,
Where early fa's the dew,

And it's there that Annie Laurie

Gied me her promise true—

Gied me her promise true,

Which ne'er forgot will be;

And for bonnie Annie Laurie

T'd lay me down and dee.

Her brow is like the snawdrift,

Her neck is like the swan,

Her face is it is the fairest

That e'er the sun shone on,

That e'er the sun shone on,

And dark blue is her e'e;

And for bonnie Annie Laurie

I'd lay me down an' dee.

Like dew on the gowan lying
Is the fa' o' her fairy feet;

And like winds in summer sighing,

Her voice is low and sweet.

Her voice is low and sweet,

And she's a' the world to me;

And for bonnie Annie Laurie

I'd lay me down and dee.

以上に述べて来たことによって、英国の愛唱歌がわが国でも明治の初期に於て、成程、歌詞は翻案であり、或は創作の歌詞にその旋律を適用したものに過ぎないが、新しい世代の人達によって、歌い始められているのを知る。そして以上に掲げた唱歌の中、二篇は『小学唱歌集』所収のものである。そこで、これに類する唱歌を同唱歌集の中に求め、英詩が如何に日本の唱歌として移植され、且つ、影響を与えているかを、同唱歌集の成立から跡づけて見よう。これが本稿の主なる目的である。

徳川氏が三百年に亙る鎖国を解くに及んで、西洋文化は正に堰を切られた流れのように、滔々としてわが国に押し寄せて来た。軍楽としての洋楽に次いで、今日の所謂、西洋音楽もこの流れに乗って、同時にわが国に齎されたのである。明治五年（一八七二）に時の政府は学制を發布して、小学教科中に唱歌の科目を加え、中学校の教科目にも奏楽の

科目を入れたのであるが、これは単に西洋諸国の学制を模倣したものに過ぎなかった。従って直ちにこれを実施する意向としてはなく、「当分之ヲ欠ク」との但し書が附記してあった。要するに実際問題としても、唱歌を教授する適当な教師もなければ、また、その教材もなかったのである。

今日の所謂、唱歌という言葉は、前記の明治五年発布の学制から生まれたものと推定される。平安時代から既に唱歌（稿者註「し、よ、う、が」と濁って読む）という言葉があつて、これは器楽曲の旋律を唱える意味に用いられていた。例えば雅楽の「越天楽」の笛の譜を「トーラーロ、オルロ、ターアラ、アー」と唱えるのがそれである。然しながら、この言葉は室町時代の末期頃からは、一般に短かい歌曲の歌詞の意に転用されるようになった。江戸時代の神史、随筆類に、小曲の歌詞のことを唱歌と記して、これは雅楽家の意味するものや現代のそれとも異なるものである。今日用いられている唱歌という言葉は、「西洋の“song”とか“Lied”とかいう言葉に対する訳語として、便宜上、昔からあつたところのものを借用したものと考えられる。

明治三年、初めて雅楽局が太政官の中に設けられ、翌四年、式部寮に移管されて雅楽課と改称された。同課では時勢の推移に応じて、帝室に於ての西洋音楽の必要を痛感して、同七年、海軍軍楽隊に伶人達を派遣して西洋音楽を学ばせたのである。更に同九年には海軍省雇英国人、ジョン・ウィリアム・フェントン (John William Fenton) を同課に兼務させて、彼について西洋音楽を伝習せしめた。東京に女子師範学校（稿者註 東京お茶の水女子大学の前身）が開設されたのは明治七年であつて、同校では学制に唱歌の科目が規定されていながら、適当な教材がない実情を考慮して、同九年頃、上記の雅楽課にその創作を依頼した。そこで、雅楽課では在来の和歌或は歌人の新作に雅楽調の曲を附けて、「越天楽」の旋律を編曲した「忠臣」や、その他「冬の円居」「ここなる門」「風車」などと題する唱歌を作った。これ等の諸作は十一年には出揃つて「保育唱歌」と呼ばれ、人心を正し風化を助けるものとして、中には或る程度、後までも歌われたものもある。「ここなる門」「風車」の如きは、明治二十年十二月出版の『幼稚園唱歌集』に収録されて

いる。

稿者註 明治維新後、欧米諸国は横浜に公使館を設け、英国公使館には赤隊と呼ばれる護衛兵が置かれた。本来、フエントンはこの赤隊附海軍軍楽隊長であつて、明治二年、島津藩の藩兵は彼から軍楽を学び、本邦人の手による軍楽隊の開祖となつた。

京都府学務課では明治十一年十一月に『唱歌』、同十三年九月には『唱歌二篇』と題する唱歌集を刊行して、これを女学校に於て使用させた。これは本邦に於ける学校唱歌集の先駆をなすものである。京都府の女学校が開かれたのは明治五年のことであつて、最初は英女学校並に女紅場と称した。女紅場の「紅」は「工」に通じ、たくみ、即ち技芸の意で、刺繡のような手芸や養蚕などを教えたのでこの名がある。同九年には英女学校の「英」が除かれて女学校となり、同十五年には女紅場の名称を廃して、単に女学校（稿者註 後年これが京都府立第一高等女学校となるのである）と称した。『唱歌』の序を見ると「こたひ学校のをとめらにはじめてつくし琴をひきならはするにつきてかのあたならむかたの心ことはをあらため君の前親のかたはらにても憚るかたなくしらべあけむものとなしてをしふることになむ」と述べ、最後に女学校と署してある。この記載によれば、使用した楽器はつくし琴、即ち十三絃の琴である。

第一の唱歌集には十五篇の唱歌が収録されていて、先ず、最初に「出雲曲」と題して、次のようなものがある。「八雲たついつもやへかきやくもたついつもやへかきつまこめに八重かきつくるつまこめにやへかきつくる其やへかきをそのやへかきのみうたよみこそ（以下略）」即ち古歌を換骨奪胎したものであつて、これを黒髪（くろかみ）の曲三下り（くろかみ）で歌わせている。『唱歌二篇』にも十五篇の唱歌が収録してあつて、その一つには次のような「なにはつ」と題するものがある。「なにはつにさくやこのはなゆふこもり。いまをはるへとさくやこの御くらの宮に。たゝむかふ。川崎みればテムニーに。たつやけふりはすめろきの。（以下略）」これは新声刈の調べ本調子で歌わせている。仁徳天皇の故事に触れ、「煙突」というところを“chimney”と読み込んでいて、私達は思わず微笑ましくなるが、当時にあつては真剣な新機軸であつ

たに相違ない。折角、古歌を改めて教育的に企図されたのではあるが、この唱歌は新らしい教育を受ける人達に迎えられるには、歌詞も楽曲も共に遺憾ながら時代に後れていた。

このようにして政府当局に於ては何等の方策もなく、学校唱歌が渾沌としている時に、音楽教育に対して深く関心を抱き、その統一及び普及に貢献したのが伊沢修二（一八五一—一九一七）であった。かねて、彼は慶応三年郷国の信濃から江戸に出て洋学を修め、次いで藩主に従い上洛して蘭学を学んで帰国した。明治二年、再び東上して英語を学んだ上、翌年、郷里高遠藩の貢進生に挙げられて大学南校に入り、明治五年には第一番中学校の幹事を命ぜられた。同六年、工部省に出仕して技師になるうとしたが、その翌年（一八七四）に愛知県師範学校長に任ぜられた。この師範学校在職時代に、彼は国語教師、野村秋足をして「ポートソング」即ち“Lightly Row”の歌に作詞せしめて、これを児童達に歌わせたのである。次に掲げるのがこの時試作された歌詞であって、これは西洋の楽曲を配した日本童謡の濫觴となるものである。伊沢修二は明治二年再度東京に出た時、英語を米国宣教師について学び、また、中浜万次郎にも師事したのであって、その間、「ポートソング」のような簡単な英語の歌も、教わったであろうことは容易に想像される。

蝶鳥 蝶鳥 菜の葉に止（れ）^エ

菜の葉に飽たら 桜に止（れ）^エ

桜の花の 栄る御代（に）^ズ

止れよ遊べ 遊べよ止（れ）^エ

稿者註 この唱歌は後年「蝶々」と題して仮名に書き改めた上、『小学唱歌集』初編及び『幼稚園唱歌集』に収録されたのであって、明治初年に於ける偶々、脚韻を踏んだ作品としても、特に私達の興味を喚起するものである。

明治八年、伊沢修二は師範教育視察及び学科取調のために米國へ遊學を命ぜられ、明治政府の第一官選留學生と行を共にした。米國では先ずブリッジウォータ―師範學校に入學し、次いでハーヴァード大學で理學を修めた。彼は師範學校在學中、偶然の機會によつてルーサー・ホワイティング・メイソン (Luther Whiting Mason, 1828-96) から音樂を學ぶことになった。メイソンは米國有数の音樂教育家であり、唱歌の教授にすぐれた經驗を持つ人であつて、当時、ボストン府學校音樂監督兼教師として令名があつた。伊沢修二は彼についての思い出を『東京音樂學校同聲會雜誌』第六号 (明治三十年) に「メイソンを吊ふ」と題して次のように語つてゐる。

「一日余ボストン府に行き圖らずも三園氏に遇ひけるに、同氏の言に、余は過ぐる日偶然途上にて物好きなる米國人にあへり。彼先づ余に日本人なりや、支那人なりやと問ふ、余日本人なりと答へしに、さらば我家に来るべしとて其家に伴ひ行き、余に唱歌を教へんと試みけり。余もあまり事の意外に驚き、何故ぞと問ひければ、彼は是非とも日本人に唱歌を習はせ、日本國に音樂を導き入れたきためなれば、その望に應ぜられたしといへり。されど余の目的は工學の修業にあればとて、終、断はれりと語る。余は此言を聞き世にも有難き仕合のあるものかな、我こそ彼の人に就きて聴えぬ耳をも聞き、歌へぬ声をも発してんと、直に三園氏に紹介を請ひてメイソン氏の家に到り、ここに余の意中を打あけて告げければ、君の喜大方ならず、応答終るや否や忽ち、ド・レ・ミ・ファの教授に取掛られたりき。爾後毎週土曜午後同氏宅に到ることし、その度毎に夕飯を振舞はれ、それより唱歌教授をうけ、翌朝また朝飯を振舞はれ、後処々の音樂學校、書籍館ライブラリーに伴はれ、(中略)午後よりは十数里隔りたるブリッジウォートル師範學校に帰り来るを例とせり。かくて追々耳も聞え、声も出て来りければ、少しにても出来得るだけ彼音樂を日本化して、我に利用さるの途を開くべしとて、彼是打あけ相談して、ド・レ・ミ・ファに代るにヒ・フ・ミ・ヨを以てし、「ライトリローウ・ライトリローウ」に代るに蝶々蝶々を以てするなど、今日我國學校唱歌發達の仁子タネともいふべきものは、早くもメイソン氏家隅の一室中に成立てるなりけり。」

「蝶々」の歌はわが国に古くからある民謡の一つで、前田林外選訂『日本民謡全集』（明治四十年三月）附録、小泉八雲編、大谷繞石訳「日本の小供の歌」に次のようなものが見出だされる。「蝶々、蝶々、菜の葉にとまれ、菜の葉がいやなら手にとまれ。」伊沢修二が試作させた唱歌は、このような日本在来の子供の歌から、思いついたものであることは言うまでもない。既に掲げたその唱歌は、彼が明治十一年帰朝の上、文部大臣に提出したメイソンとの合作の「唱歌掛図」に対する「掛図解説」（東京芸術大学音楽部所蔵）所載のものである。なお、同掛図と同時に提出した「唱歌法取調書」に次のように記されていて、明治十五年刊行『新体詩抄』の著者に先んじて、日本詩歌の押韻に言及している。

「我国ノ歌謡古来一定ノ押韻法ナシト雖モ元來押韻ハ自然ニ謡ノ調子ヲ整ルノ性質ヲ具セル者ナレバ古來ノ琴歌俚謡等ニモ知ラズ識ラズ押韻ヲ用ヒシ者其例少カラズ（中略）此掛図中ニ用ル謡詞ハ素ヨリ小学ノ最下級ニ用ルモノナレバ決シテ高尚ヲ旨トスルニ非ズト雖モ押韻ノ如キハ唱歌ノ調ヲ整ルニ最モ肝要タル言ヲ待タザル所ナレバ成ル可キ丈之ヲ用ルヲ旨トセリ」

これより先、偶々、留学生監督官として在米中の目賀田種太郎も、かねて、わが国に於ける音楽教育の振興、確立の必要を痛感する伊沢修二に賛同し、彼等両名は明治十一年後者の帰朝に先立って、「学校唱歌ニ用フベキ音楽取調ノ事業ニ着手スベキ、在米国目賀田種太郎、伊沢修二ノ見込書」なる上申書を作製して文部大臣に提出した。更にこの上申書に目賀田種太郎は、「我公学ニ唱歌ノ課ヲ興スベキ仕方ニ付私ノ見込」と題する一書を添附して、唱歌教育の科目を東京師範学校及び東京女子師範学校に設置すること、これによってわが国楽(National Music)を振興すること、この科目を担当するために西洋音楽の知識ある教師を委嘱すること、その最適任者はメイソンであること、なお、補佐として伊沢修二を推薦すること、右の科目を師範学校の附属小学校、幼稚園にても教授すること、以上の事業が実施成功の後、これを他の公学校に普及せしめるようにと、上申書所説の目的実現のための方法を詳細に説いている。

稿者註 国楽については「我国古今固有ノ詩歌曲調ノ善良ナルモノヲ尚研究シ、其ノ足ラザルハ西洋ニ取り、終ニ貴

賤ニ関ハラズ又雅俗ノ別ナク誰ニテモ何レノ節ニテモ日本ノ国民トシテ歌フベキ国歌、奏ヅベキ国歌調ヲ興スヲ言フ、是レ国歌ノ名アル故ナリ」と説明して、或る点に於ては『新体詩抄』の著者と一脈相通じる趣意を述べている。

伊沢修二は明治十一年に帰朝すると、東京師範学校長に任命された。かねて、わが国の音楽教育が渾沌として、暗中摸索の状態にあるのを遺憾とする彼は、早速、その理想の実現に着手したのである。ここに於て、政府も学校唱歌を統一指導する機関の必要を認めて、明治十二年に文部省内に音楽取調掛を設け、彼をその掛長として兼任させた。掛長としての彼は、米国に於ての音楽の恩師、メイソンを、明治十三年に雇教師として迎え、わが国に於ける音楽教育の研究、指導を委嘱した。音楽取調掛の諸員も共に協力して、各方面にわたって調査を行い、わが国固有の音律をも考慮して、彼の長を取りわが短を補い、その結果、学校唱歌として適当な多数の歌曲が選定された。音楽取調掛は後年、音楽学校に発展するに至るが、本来、これは完全な学校ではなくて、音楽の教授もするが、また、その調査をもする機関であった。成程、将来学校唱歌を教授し、やがて、わが国の音楽を背負って立つ、有能な伝習生を少なからず養成したが、先ず、小学校児童用の学校唱歌の制定、編纂を企図したのである。

さて、選定された多数の唱歌は、師範学校及び女子師範学校生徒、ならびに両校附属小学校児童に課して、その適否が試みられた。そして取捨選択の上、最後に得たものを纏めて梓に附したのが、即ち『小学唱歌集』三巻である。同唱歌集は初編が明治十四年十一月に、第二編は十六年六月に、第三編はその翌年の十七年六月に、相次いで公けにされた。初編には三十三篇、第二編には十六篇、第三編には四十二篇の多数の唱歌が収録されている。この間、メイソンは明治十五年に任期が満ちて帰米したので、翌十六年に海軍省雇教師のドイツ人、フランツ・エッケルト (Franz Eckert, 1852—1916) が、音楽取調掛の教師を兼任することになった。彼は既に述べたフェントンの後任として、明治十二年に來朝したのであって、ドイツの音楽をわが国に伝えた人である。メイソンが帰米した時には、『小学唱歌集』第二編の歌曲は全部選択が終って、第三編のそれは着手したばかりであった。メイソンの在任中は伊沢修二に取って、確か

に恩師に対する遠慮もあつたが、第三編の編纂には、エッケルトの協力を得ながらも、彼独自の指導精神が現われている。即ち、日本人のための日本的な唱歌の創造に、重点が置かれたのである。

『小学唱歌集』の楽曲は、西洋のそれをその儘に踏襲したものが多く、歌詞は西洋の詩歌を翻案したものもあれば、わが国固有の古歌を用いたものもあり、或は新作に係るものもある。歌詞は旧来の陳腐な域を脱していないが、楽曲が醸し出す清新な韻律の力強い働きによって、一種の新らしい風趣を生じている。本来、唱歌は多数の者が斉唱する平易な歌曲であつて、近代の西洋の民謡は概して唱歌の形式に属している。『小学唱歌集』にはこれ等洋楽の中、通俗的なものが多数に採用され、その簡易平明から速やかに普及するに至つた。明治十五年、新詩運動の狼煙として折角刊行された『新体詩抄』が、措辞が蕪雑なために、芸術的価値のない過去の遺物として、全く葬むり去られているのに反して、『小学唱歌集』の中には、明治、大正両時代を経た今日でも、なお、依然として昔ながらに歌われているものがある。即ち、初編の「蝶々」は幼稚園や小学校の可憐な児童達に愛唱され、第三編の「才女」及び「菊」は都会の中学校、高等学校の女子生徒達によつても歌われている。初編の「螢の光」や第三編の「あふげば尊し」は、私達が小学校の校門を去るに當つて、無量の感慨に打たれながら、声高らかに歌つたところのものである。

稿者註「螢の光」即ち初編、第二十「螢」がスコットランドの詩人、バーンズ (Robert Burns, 1759-96) 作 “Auld Lang Syne” に對する。楽曲を用いていることは余りにも有名である。邦語歌詞の作者は不明であるが、『小学唱歌集』の主なる作詞者、里見義、稲垣千穎、加部巖夫等の中の一人であらうと考えられる。初編、第二十四「思ひ出づれど」の曲も、“Bonnie Doon” の名で知られるバーンズ作 “Ye Banks and Braes” のそれを適用している。作詞者は稲垣千穎であつて、彼は東京師範学校教員であつた。なお、以上の楽曲は何れもスコットランドに伝わるものであつて、作曲者は不詳とされている。

今、第二編を披見すると、第四十八に「太平の曲」と題する、次のような唱歌が掲げてある。

一 ゆはづのさわぎ。飛火のけぶり。

いつしかたえて。をさまる御世は。

あめつちきへも。とろくばかり。

万代までも。君が代いはへ。

二 たひらのみやこ。百敷の宮。

みあとになして。むなしの国に。

しづまりましぬ。年は三千とせ。

代は百二十。御功績あふげ。

「太平の曲」については伊沢修二稿本『唱歌略説』に、「此曲ハ千八百七十二年合衆国ニ於テ万国太平協会ヲ開キタル時米人ケラル氏ノ太平ノ精魂ヲ頌シ作レルモノニシテ、原歌ハ有名ナルドクトル・ホルムス氏ノ作ニ出ツ。其意ハ太平ノ氣ヲシテ長ク国家ヲ保護セン事ヲ祈ルナリ」と解説が施こしてある。ドクトル・ホルムスとは、米国の学匠詩人 Oliver Wendell Holmes (1809-94) のことである。彼の作詩の一つは“A Hymn of Peace”と題するものがあつて、その詞書は“Sung at the ‘Jubilee’, June 15, 1869, to the Music of Keller’s ‘American Hymn’”と記されてゐる。成程、記載の年代には異同があるが、『小学唱歌集』の「太平の曲」は、明らかにケラーの作曲を踏襲したものである。なお、邦語の歌詞はホウムズの原詩と、その内容を全く異にしているが、少なくとも歌題は、それから借用したものであることは論を俟たない。参考のために“A Hymn of Peace”の全篇を次に引用しよう。

Angel of Peace, thou hast wandered too long !

Spread thy white wings to the sunshine of love !

Come while our voices are blended in song,—

Fly to our ark like the storm-beaten dove !

Fly to our ark on the wings of the dove,—

Speed o'er the far-sounding billows of song,

Crowned with thine olive-leaf garland of love,—

Angel of Peace, thou hast waited too long !

Joyous we meet, on this altar of thine

Mingling the gifts we have gathered for thee,

Sweet with the odors of myrtle and pine,

Breeze of the prairie and breath of the sea,—

Meadow and mountain and forest and sea !

Sweet is the fragrance of myrtle and pine,

Sweeter the incense we offer to thee,

Brothers, once more round this altar of thine !

Angels of Bethlehem, answer the strain !

Hark! a new birth-song is filling the sky!—
Loud as the storm-wind that tumbles the main

Bid the full breath of the organ reply,—

Let the loud tempest of voices reply,—

Roll its long surge like the earth-shaking main!

Swell the vast song till it mounts to the sky!—

Angels of Bethlehem, echo the strain!

第三編所収の第七十八「菊」は今日では、「庭の千草」という題名で人口に膾炙している。この唱歌がアイルランドの詩人、トーマス・ムーア (Thomas Moore, 1779-1852) 作の“The Last Rose of Summer”即ち「残んの夏バラ」の翻案であることは、かねてから一般に喧伝している。「残んの夏バラ」はムーアが嚆矢した『アイルランド曲調』 (“Irish Melodies”) の中の一篇であつて、本来、その第一行を取つて“’Tis the last rose of summer”と題されたが、現在では“The Last Rose of Summer”と広く呼び慣らされている。なお、「菊」の楽曲はこの詩に對するそれを用いたものである。この曲は古くは「ブラーニイの森」 (“The Groves of Blarney”) と名づけられたが、ムーアがその詩に配するに及んで、「残んの夏バラ」の名によつて、一般に歌われるようになった。ヘーナーマン (Ludwig von Beethoven, 1770-1827) はこの曲を非常に称揚して、ピアノ伴奏譜を作つたといふことである。ドイツの歌劇作者、フローター (Friedrich von Flotow, 1812-83) は自作の歌劇「マルタ」 (“Martha, oder der Markt zu Richmond”) の中にその全曲を取り入れている。

『アイルランド曲調』(1807—34) はムーアが自作の詩に、夫々、楽曲を附して次々に刊行したものであつて、彼の詩

『小学唱歌集』と英詩翻案

は読むよりも寧ろ、吟ずべきものであると時には評されている。彼は自作の感傷的な詩を朗誦するに際して、彼自ら無限の哀感に胸を塞がれ、流れ出る涙を禁じ得なかつたと伝えられている。『アイルランド曲調』の中には、「残んの夏バラ」を始めとして、「水の出会い」(“The Meeting of the Waters”)や「遊吟詩童」(“The Minstrel Boy”)のよな、詩と音楽とが全く巧みに調和した、吟誦すべき優美な調べのものが挙げられる。然しながら、その百二十余の詩篇の中、今日まで愛唱されているものは、僅かに十数篇に過ぎず、その他は遺憾ながら殆んど顧みられていない。次に「菊」とまた、これと比較するために、「残んの夏バラ」の全篇を掲げよう。前者は二節、後者は三節から成っている。

一 庭にばの干草ちぐさも。むしのねも。

かれてさびしく。なりになり。

あゝしらぎく。嗚呼あゝ白菊しらぎく。

ひとりおかれて。さぎにけり。

二 露つゆにたわむや。菊きくの花。

しもにおごるや。きくの花。

あゝあはれく。あゝ白菊。

人のみさをも。かくてこそ。

'Tis the last rose of summer

Left blooming alone;

All her lovely companions
Are faded and gone ;
No flower of her kindred,
No rose-bud is nigh,
To reflect back her blushes,
Or give sigh for sigh.

I'll not leave thee, thou lone one !
To pine on the stem ;
Since the lovely are sleeping,
Go, sleep thou with them.
Thus kindly I scatter
Thy leaves o'er the bed,
Where thy mates of the garden
Lie scentless and dead.

So soon may I follow,
When friendships decay,
And from Love's shining circle

The gems drop away.

When true hearts lie wither'd,

And fond ones are frown,

Oh! who would inhabit

This bleak world alone?

「菊」の翻案歌詞の作者は、里見義であろうと推定されている。彼は国文学に関して、造詣が深かったということである。音楽取調掛長の伊沢修二が作詞者の便宜のために、予じめ「残んの夏バラ」の大意を訳出して、「千草、八千草、虫の声も……」と、旋律に乗る程度に訳詩を示した。これを基礎にして上掲のような歌詞が出来上ったのである。ムーアは生来明朗な性質であつて、然も鋭い機智を有していた。従つて「光る眼のレズビア」(“Lesbia hath a beaming eye”)のような軽妙洒脱な作もあるが、「残んの夏バラ」や「水の出合い」のような作には、憂鬱な気分が漂よつてゐるのが認められる。当時、彼は詩人としてバイロン(Lord Byron, 1788-1824)に次ぐ名声を博し、且つ、社交界の花形として、世間から迎えられたのであつた。

彼は『アイルランド曲調』を、初めて世に問うてのち数年ならずして、劇壇に嬌名を謳われていた女優のベッシー・ダイク(Bessy Dyke)と結婚して、円満な家庭に在つて詩作の筆を取つた。成程、このような境遇に於て、七十三歳まで長命したのではあるが、不幸にして愛児に先立たれ、年金を賜わる安易な身でありながらも、妻とただ二人淋しい晩年を送つた。「残んの夏バラ」を誦読する時、私達はこの一事を期せずして心に思い浮べずにはおれないのである。今、「菊」と「残んの夏バラ」とを比較する時、歌われている花が洋の東西に従つて異なつてゐるのみならず、花に対する見方、換言するならば、人生に対する見解の角度にも相違が見出だされ、少なからず興味を唆られる。然しながら

ら、何を差し置いても、バラを菊に置き替えた趣向の良さが認められる。そして翻案の歌詞は全く日本的であるにも拘わらず、原詩の楽曲が心憎い程調和しているので、優美な旋律の浪に乗って、私達の心にしみじみと追って来る。「庭の千草」が代表的な英詩翻案として、今もなお生きる所以である。

附記 『小学唱歌集』第三編に収録されている次の二篇も、また、英語の唱歌を換骨奪胎したものであって、楽曲も夫々に対するものを踏襲している。即ち、第五十四「雲」(瞬またたき間には。やまをおほひ。うち見るひまにも。海をわたる。——The clouds that sail o'er hill and dale,) は、英国の作曲家、モールコット (John Wall Callcott, 1766-1821) の作曲を配したもので、原詩はサグデン (W. Sugden) の作になる。第七十「船子」(やまなな)。こげ船を。こげよ〜。——Row, row, row your boat/Gently down the stream;) に対する曲は、ライット (E. O. Lyte) の作曲であって、原詩は輪唱として坊間の各種の唱歌集に収録され、現に人口に膾炙している。然しながら、翻案のそれは遺憾ながら、今日では全く忘却されてしまった。

本稿は文部省科学研究費交付金による研究成果の一部である。